エッセー

一般教育部での共同講義の思い出

竹原　創一

私は1986年4月に立教大学一般教育部人文社会学科に着任しました。当時の学科長は、NHKラジオ番組「音楽の泉」の解説者でお馴染みの皆川達夫先生でした。そのころ一般教育部の総合科目に「ルネサンス講座」と称する共同講義が開講されていました。ルネサンスをめぐる諸問題を、いろいろな領域から、それぞれの専門の先生が集まって、リレー講義をするものでした。ルネサンス音楽を専門としながら日本のキリシタン音楽のルーツを究明していらした皆川先生、キリスト教美術の専門家としてイタリア・ルネサンスの名画を豊富なスライドで紹介していらした名取四郎先生、古代哲学者アウグスティヌスの専門家としてルネサンス期に復興した修辞学の伝統を流麗なラテン語を披露しながら講じられた加藤武先生、フランス文学者としてユマニスムの思想を軽妙に語られた細川哲士先生、数学者として科学史を思想史と結び付けて興味深く講じられた座間宣夫先生、これらの先生方が常連でした。宗教改革を専門とする私も、着任の翌年からこの講座に誘われ、ルネサンスと宗教改革の関係について語る役を担当することになりました。従来の自分の研究を超える大きなテーマなので、先輩の先生方の前で講義することはおそれ多く緊張しましたが、学びながら教えるよい機会となりました。最初はとにかく聞き役に徹しました。毎回それぞれの専門領域からの興味深い講義が展開され、参加者全員の関心が高められていきました。ときには15～16世紀西欧ルネサンスという枠を外れた自由な議論もまじえながら、全体としてルネサンスとは何かが問われ、徐々に解明されていきました。学問・芸術の創成と再生、分岐と統合が、古代から現代への流れにおいて、洋の東西を視野に入れて論じられ、それは一教員が教えうる範囲を超えた、まさに共同講義にふさわしい内容であったと思います。あるとき皆川先生が受講生に向って、「こんなに大きなテーマの追求が、この限られた授業内だけで完結するとはけっして思わないように。各授業で提示された課題に各自果敢に取り組み、自ら理解を深める努力をするように」と注文をつけられました。当時は1年間通した4単位科目で、学生には夏休み中にレポートが課せられました。挙げられた課題図書と格闘したレポート作成を経て学生の理解は格段に進み、後期の授業での議論は深まりました。

この科目の担当教員は一般教育の理念について考えずにいられませんでした。一専門領域の究明に留まらず、広い視野で、諸領域の関連と統合を目指すこの科目を一般教育のモデルとして位置づけました。一般教育科目が低学年向けの初歩的科目として、専門科目への単なる準備教育とみなされがちであったときに、専門教育と並行しながら、あるいは専門教育を修めた後にもう一度総合的観点から、専門教育で得たことをとらえ直す機会とみなしまし

た。当時立教大学のカリキュラムではすでにそのような理念によって、一般教育科目が4年間にわたって履修されるように編成されていましたし、実際このルネサンス講座には、1年生から4年生までバランスよく参加し、各自学びの進度に応じて、総合科目の意義を汲み取っていたと思います。全学部・全学年からの受講生の質問や意見は多様で鋭く、この総合科目を活性化しました。それぞれの教員から提示される世界観・人間観がどのように総合されうるかは教員自身にとっても問いであり続け、互いに教え学び合う試行錯誤の連続でした。

その後一般教育部から全学共通カリキュラム運営センターへの移行（1995年）、担当教員の定年退職などによって、「ルネサンス講座」はしばらく途絶えていましたが、2009年に同様の趣旨で全カリ総合主題別科目の「リベラルアーツの源流」が復活しました。古代ギリシアの自由人に発し、中世の修道院や大学を経て、近・現代の大学にまで受け継がれてきた「自由学芸」の伝統を、その源となる「自由七科」を基に、各専門領域の教員が共同講義するものです。かつての「ルネサンス講座」の経験者である田中秀和先生（自然科学史担当）と私（キリスト教史担当）のほか、新たに音楽史担当の星野宏美先生（2009年以来）、美術史担当の黒岩三恵先生（2012年）、加藤磨珠枝先生（2013年）が参加しました。また2012年度からはリベラルアーツの本家とも言うべき哲学を専門とする佐々木一也先生が加わり、一挙に総合科目としてのまとまりを得ました。

こうして「ルネサンス講座」と「リベラルアーツの源流」は、私の立教大学在職中、苦労しながらも多く学びえた、思い出深い科目となりました。

たけはら　そういち
（本学文学部教授）